訓幼字義　一

天道　天命
道德　理

日仁3
937
1

阿仁
號 937
卷 1-4

東涯先生著

訓幼字義

京兆　廣文堂發行

京都帝國大學圖書

訓幼字義序

學將以盡人之所以為人之道也人苟於日用彝倫之間絪蘊其道則雖曰未學尚謂之已學矣況玩聖人之遺言通儒先之訓解略了大義則亦可以已

何必章梳句爬屑三焉被其異同離合於錙銖抄忽之皆乎哉
然吏讀聖賢之書則當審生所
謂仁是指何物所謂義果言何
事而投不迷其所嚮方居住靈
已徂激言不明先儒雖窮力講

明而曰探索之甚密而致矯枉
之過直所謂仁也而仁不同所
謂義也而義不同此所以學有
古今之變也先君子服膺先儒
之成說二十餘年初而信中而
疑終而釋然以指聖人之道不

已日用彝倫之間不可向此上面別求一種至理立言著書誘進後生亂不肖生三十六年而先子見背爾守裘業責在後人管窺豹績亦稍有書然詞既欠明後亦不弘加以方語言不同致鄭生之難晓於見擢諸孟字義條款稍加隙拓演以國語名之曰訓幼字義第六五經大義則當為著故概而弗及起筆於丁酉之夏初而脫藁於臘月以辭為類凡二十六條凡三

百二十六。其增損改潤。出于余。

日云尒時享保二年冬日

伊藤長胤撰

慎慎齋藏

訓幼字義目錄

卷之一　天道　天命

卷之二　道　德　理

卷之三　仁　仁義禮智

卷之四　中誠　忠信　忠恕　恭敬　權

卷之五

伊藤氏學

造造齋藏

巻之六　心
性　情
巻之七　四端之心　良知良能　才　志　意
氣
巻之八　聖賢　君子小人　學　鬼神

目録畢

訓幼字義巻之一

天道　凡十三則

右の経書に天道とかゝ不ふ二語あり。一つへ人のうくる所の吉凶禍福。自然にして人力の及ぶ所にあらずして書経湯誥篇に不ふ得ざる福。若猶渙易説卦象に不得ざる嗛盈益謙などの類これなり。一つへ陰陽往来やまざる上ふ能くなる所にして易説卦に立てる所の陰陽又云一陰一陽と謂ふ所なり。先儒の説に猶猶の上ふ能くいふと雖ども天道の流行の上ふ能くいふと流行の所にあるいふ。能れも天道の所にあるゆゑむしへのうくる所の上ふあるいふ流行の中にあるいふ雖ども流行の所にあるあり

造造齋藏

有あり。須
てゝ乃ちは二階あれども。詩書諸篇よ說ところのてゝ乃ちは。多
くは宰の上よ。結くらへ。陰陽流行のことてゝ乃ちなり。
如。たゞ易にいへる陰陽のみと說ところ有に。十翼の中。
陰陽流行をてゝ乃ちなり。上にあくるところ宋明の先儒
等。皆ものふるこゝろ。陰陽消長の理を推してこれを說ところ。
古西鵩編はあるこゝろと。乱義にあり。須辨を
爲べし。
乃ちなり。本人の往來奔走ところ乃路の名なり。ことろ
てゝ乃ちなりなり。その室行一陰一陽往來やまざるの人
の乃ちと行く往來ところなり。易の上系辭第

八章に一陰一陽之謂道乃ちなり。道一の字と陰陽字上
にとゝこゝに一圖一陳謂ところ。一張一弛文武之乃ちなり
ことゝこゝ。古往今來四時晝夜の日。或は陰ところ或ち
陽ところ。ひゝ流ふ往來窮盡行しゝくやまざるを形容し
てこれとてゝ乃ちなり。徘徊ところ。詩孟字義にこれとあるに
せり。又古西鵩編とてゝ乃ちなり。往來ところにこれとこれ
も。古西張衡の賦に月往乃ちあるふるこゝろ。又これ行
乃ちなり。賓冥冥号今の人君の乃ちなりふるこゝろ。又月往の乃
とてゝ乃ちなりあり。中庸に謀者てゝ乃ちや。謀ハかる者人ことろ
やこゝろなり。人の法生知安行ところ。法をふるこゝろ
と。各ものゝ乃ちなり。とてゝ乃ちなり人に對してこゝろ。

自然のことをこゝにて人とこゝにて多くを爵
人身の類又人〳〵このゝ中に陰陽とこゝにて陰陽
陽とこゝにて人の道を行ふ道あるを以て道とこゝにて
世の字同様とこゝにて法せるゝ陰陽の法流行ふ
ゆゑとたつ孫ゆゑんの理とこゝにて道とこゝにて
こゝに易の辞の本義ふいつく陰陽往来者氣也
則百穀百物人のことにあり今日地の道
又ふ本名數物生ゝ皆陰陽の切
用ゝ者古のされもの〳〵ゝ者古の法もの〳〵
いつはゝ者ゝいつるもの〳〵ゝ

こゝに古六経の中にこゝにて偏とこゝにて易こゝにあるこゝにあ
り乾の象にいつく大乾元の物資始乃統天坤の象ふ
いつく坤元の物資生乃順承天ゝ〳〵ゝ
ゝ乾元ゝ陽気とこゝにて地
の乾坤元とあるこゝにて一元気の物の生陽気と
こゝにて陰気とこゝにて生ゝ父母のゝや先人
諸孟字義とあるこゝにて地の名一元氣のこゝにて
こゝにこゝにて一つの物
ゆゑんの理とこゝにて人のこゝ
こゝにこゝにて人の畫動活こゝにて地のゝとゝゆゑん
ひあるゝ大地質のこゝにて人偏用と先務こゝにて

生のとゝ（入）日巻物日ゝ家園てゝ物と物ともつてゝ紙
ゝつゝゝゝゝて字物の生ゝとる人何とゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝ法ゝ法ゝ法ゝ陽造化
の理字問ん物中準則ゝゝゝゝ字書の常に藤冤ゝ
生ゝゝれゝゝゝ飛潛生ゝと弁せゝんゝゝゝ人家
物傷ゝの字問と振膏ゝゝゝゝ中巣ゝゝ巣
性自潛ゝて結亀の二書にゝゝゝ古賢のゝゝ
潛ゝ若ん多年修理分明書とゝゝゝ後ゝて
ゝたひと西ゝゝゝゝゝゝゝ朱書にゝゝゝ流不肖ゝ
多ゝゝ多参仙考冤ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

結亀字義にて地ゝ乃有ゝ生ゝ乃ゝ家ゝ乃ゝ
ゝて人多ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ傷の説ゝ生ゝ乃巣ゝ皆理ゝ乃ゝ宰ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
生ゝゝ生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
理ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝ字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さい或いやうを或い物消滅と消滅とをり
いてうくい必人の力と待てあるべき地のうもきてきうう
万物の始終とうくうくれいのうくうきれの去つあるとく
ともてうれのうりかうきてきるの要れ生きるの不生れ一物生者
や故ふ易ふいてく大乾元第物資生又曰て地て大
彖曰生又曰生生てく謂易てくてとあてうるあてくとや
或の物人らく先傷の説も陰陽の往来流行ることと
くいてうくいひくくてふいひ極るゆもんの理と去るふあ流と
ひてく朱子の諸類名と考るふ注来とるると直いてうく
とうの信一二ヶ修ん人くうう陰又一陽循環不窮乃乃や
只説陰陽使見深陰陽注来循環不窮乃乃注解

乃乃くのの説あもくもきれれたく復卦の日大略ふ往とう
故ふとくいて陰陽注来とうあとうてうてうくくうれ見れくくと定
説ふあく決惣別諸類い早年晩年のちひあう又い門人
記録の年にのうてくうれい定説くたてうあうやく朱子の
定説理氣のあくふくい大極解易の本義まとくく正
義くくて定上に諸類ときく考くくく極れい朱子の平説
てうてうてうのいてうてうて理とまくくていひてうりのうく注
来とう所とさとにあくくうるきうくく
てうてうの言思雑疑人くくのうてうてあう聖賢のてうく
ふい言ととれい稿と浮雲ととれい稿と主てうくく書よ
曰稿表稿注くく又云作吉降之百祥作不吉降之百殃易

云積善之家必有餘慶積不善之家必有餘殃独しぶくひ経書の
うちにおきくゆえくちぶ強れとを古そのことを考るふ善人の獨と清
て不仕合よりまた或ハ刑罰よりふのまたおけく計ハ
又悪人の仕合くハ門戸とさやうゝゝ子孫繁昌ありなり。
まくく何れくいてくとまくく決定ふ乃至邪邪く
いてのうくうひあるふ馬遷ふ伯夷の傳のまくこと篇結この
ともむきあるふ乃至ハてうくとせく物りひ乃至人のをくへと物り
て笑くくうふくうくしけくこうひあるふ上人ふるとくあれく
てうくと論ふる者ふるくにあるくうくふ乃至人ハふるひうく
くてうくと言ふ大服月といくく唐くをくへと示されうくまれ
なれハ福善禍淫のまくくゝ義古たくふるあるゝ

てうくの張良一人の上に独くくれくたくふるあれくを。
千万人のうくよりてまれくとなり。一時のう
にくくくハたくふるなり。千万世ふるまくくてあれくを
也ハくうくてあるまくくくくくくくくくく一
時よくうくくくくくくくくく

て猶よあらと或は福と滑くものもあるもそれなるべくのるみるべく打〳〵あるべくは花あるべくもあるべくいかるべくもあるべくもたるべくのるふるべく〳〵滑くとるべくべく〳〵行〳〵れるあるべく〳〵べく氣べく〳〵うべくと滑せべく打べくべくべくふべくべくべくべくべくべく人多勝て天宮糸紙猶人べくべくべくべくべくべく世の人乃べくべくべくべくべくべ

四海をたもち、群禹は位をゆづりたまふ。されば、あらゆる善者
あるいは福を得あるいは罰せられ、人てんをとうとぶ。
をのおのをとうとぶ。世ふるにつれて、をのおのとうとぶ。
の義なり。をのつから貴賤をせうるにつれて、福は善にあ
あるいは福を得るの義。きふ善をすすめ、をのたつとぶ。
くのごとく人のてふさつ、をのたつとあり。殷紂の
くるはよをくるし。伯夷叔齊は、周に隱れ、崇侯鄂侯乃
ちくさ惡人と為す。武王の世なり。紂豪惡にして、比干の墓を封ず。高容の
家に礼。礼は十人を挙げ、武王のりくをたつとぶ
事なり。をのつからこれまをくをたつとぶ類ひあるべ

をのたつとぶ。あるいは何を人のあるのあるべきと
をもひて、をのの貴賤の自然まんをとぶ。をのおのの
をのつから
天地をみる象のりのをとあるべ。又人の行くをとあ
あるべ。後世先のをとををのつから帝王の人間人
君の象あるべ。衣冠服をかぶり、百官儀法を教安府の
類まをもつてあるべ。九をの上にいたるをつをこれ。
玉皇こ法の說なるべ。人の善惡にををひて貴罰ををと
人あるべ。善をすすめ、をのををのををををををを
うやまをををあるべ。後世をを附去をるべ。
ゆををを誣妄論ををたをも。後偏貴墨の徒もこれ。

まことをたゝしくして、ゆがめふりまどうりのしたがはざる
こゝろ。程子のいはゆる言則謂之誠、朱子集注の
いはゆる実理なり。邪僻なるこゝろの行をしるす。北溪字義に、朱子に
こゝろの行をあらく曰、上帝震怒也只是一箇恐懼也。
はしりはやくこれをくゝるものは、畢竟一箇の利字
にて、ものゝ多くの獲罪於天、無所禱也と、程子に
ありきれば、世間をとんでく百物の一源にせまるゆへ、
のこらずして、雜なるこゝろ、虚霊をいとなみて、
本末あるこゝろ。そこなく所を人のてをつくしたるこゝろ
物にしたがふあるこゝろ。まことをしんの程にしたがふこゝろ。
たくさんのものにして、家をたもつこゝろの
のこらず、何事にもこゝろをつくさのこゝろあるとき、
他をとがめ、こゝろを守りてこゝろ命にたがはざるこゝろ。
とて、我身をこゝろをとゝのへ、己れを敬をしるす。孟子に、夭壽不貳、
修身以俟之、所以立命也、しるす詩、程子いはゆる對越上
帝、こゝろを示、この身にあるこゝろ。徳行と智恵分別をしるす。
さらむつさのこゝろ。徳は正直仁義智恵の地位
あるこゝろ。貞の不可渝の用、やこゝろをもつ
きこゝろ。
淺偏吳の説ふてをとゝのふ。ものゝこゝろ、
そのこゝろとて、万物のうへ、ものゝ長あるこゝろ
ものゝ得失をあくこゝろ。

来るしいくつ春秋の注象ふの伝ものつことを多し紘れこと
かくのこくてこれをとりこしつこれに或ハ合ひ或ハあつもと人の意
とひこさてこくひくあるこらゆつこせふもとのこたつこと生じ何
そもしいすこ（竟に九年のあつ湯ふ七年の旱あつて望王の世
にこと学ふこきまつこもこ後世漢の諸帝の代ふ霊芝其霧
麟鱗鳳凰ふの瑞物ふこ〳〵史策ふあこつれこも。望代もひ
ここ。人の上ふ位さくもこるを位くぬくてこ学ふこるものあれ
ここもこ不拘思の人ふあこ次又思人ふと不思議の奇瑞を象
るあつふれらのつ皆公付月せこるつ多こそれゆへ玄妙ふ。
学ふ学ふこきここて。幸意ことこと。論語ふ子不語怪力乱神く
いつる。神ここへ学ふ祥瑞のふくひあつ徳ふ史ふの風雷不

玄河不出圖ここへ何そや。是ハ風雷河帝の類ハ古つ所望王
世ふ所ふつの瑞ふ言つこへこるふこて出れこつく。望王の
時ふ出ることこと欲ふ。たまこへ望王世ふ出ふこれハ。
必祥瑞あここふあこ次望人こふこと学ふ人ふ
上ふ出ることをこつ。
先人常ふいへこ必徳ふ人ふ自家ふ出こ若ふ
ひこ濫ふ偽ふこへこ必徳ふ出ふ出ることなれの程
ふあこ次徳ふもこれふこつ。ひこへ必ふ人の上ふ出ることく
これふ自ふ家民ふ視ふ天ハ自ふ家民ふ
徳こ。又云民之所欲天必從こ。即この意ふ書の
ふこと学ふ人ふ上ふ出ることを待ここ。天ハ言ふ者ふ
ふ学ふこれふ天ハ言ふ者ふ

慶應義塾

拙命を辛しとて孟子の言を不言以行の不
言を言とし又曰使之主而百神受之是天受之也天與之人與之と
ある事治百姓安之民受之也天與之人與之と
云へり聖賢の言を云へり人の上ふにいとこれをた
ゝんとて人をとゝのへて云へるにあらずこれをもてもつて
天下の人はゝくをもつてこひいてゝくい即てんのようなる
天下の人うゝゝみゝくむい即てんふうゝ孟子にて
めふいて與をゝあらゝ。ひとふ天與之人與之と
ゝ。ゝ。天をのゝをとゝのへゝ
れゝ

元亨利貞と曰法ゝゝてゝ乾ゝのひ四時ふ配南ゆゝゝ

易ゝゝ出ゝゝてゝゝ乾ゝも詳ふ易の本旨をかんゝゝふ。本
人ゝゝにゝゝゝくいひゝゝてゝふゝ。てゝ乃ふあゝゝ法。先乾の
卦辭ゝ元亨利貞ゝあゝゝ易ゝ本ゝ筮の書ゝ乾ゝ筮者は
卦ふ取あゝゝたゝゝ乾ゝ。かゝゝゝ得ゝゝいてゝなゝ亨ゝ色
ゝふゝ。貞ゝゝゝ乾ゝ。えゝゝ利ゝ宜ゝゝ二ゝ居字
なゝ。はてゝさゝゝゝ卦ゝゝゝゝゆゝ。ゝ上ゝゝ物ゝ正
直ふ法ゝゝゝゝゝ乾ゝふ。乾の卦。屯の卦法の卦
ゝゝ。元亨利貞の辭あゝ。ゝ修。或ゝ元亨。或ゝ大亨。或ゝ利
貞ゝゝゝもあゝ。乾ゝ純陽の卦ふゝ。六十四卦のゝたる教
に。彖の文言別ふ孔子ゝ。ゝ聖人の上ふ教ゝゝ出れを法大
哉乾元ゝゝゝゝ。ゝ元氣のふ說ゝゝたゝふ四法ゝ

慶應義塾

ものたるこゝを見んこと。文言ふ。元者善之長也。亨者嘉之会也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子体仁足以長人。嘉会足以合礼。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四徳者故曰乾元亨利貞。仁とは人の昂えるなり。四の徳を君子能上ふるひて。仁を第一とし次とつぎつぎに。大抵古人書をとゝむこと。治世のつゝくに基物とし。易の十翼も一よに出るふあり。次に各面目とゆくゆくなるを段々せるにして義理同かゝること。文言彖辞と分ゝ四徳〳〵。專人のふ然ゝ古れを段々と。四時ふ配当ゆるはんこと。王弼韓康伯注に来。ものゝ四時の徳〳〵定て。今にいたるまでそを守れども。易の本旨あり次

天命　元二十一則

て。命〳〵の〳〵。命は号令命令のことなり。ものゝ云へ。帝王乃詔勅宣旨あるこゝ。今日人〳〵乃上より然ゝ。古の禍福さゝ〳〵あるゝ。同〳〵の次。一人の仕合と。一人の不仕合あるこゝろ。少しを人力のあるゝとゝて易と。て命〳〵とつゝて。こゝのひ付のあるゝ。経書にて命〳〵とつゝ。何をいふ。ものゝ。治世にいたりて。命に程の命気の命下の。こ禍あるゝ。古の禍福をこゝろの不同と気の命〳〵云ゝ。人物〳〵ゝ。の正理と程の命とつゝ。人のことあ次。書よ

正習命ハ皆気の命にして理の命となる〜

先儒の説より出りて〜陰陽流行変化やまざるを天の命と
あしとる宰治の理あり故に命の流行して物に賦
與するものなり人あるいハ仁義礼智の性あり是れ理の命
なり十紀て命をつかひて命之謂性とのたまひ何も
理の命をさしていへり〜気より物に賦与あり一般を
変富貴貧賤寿夭禍福の志ふ人のうけやうにかかる
上より物に賦与して死生有命なるなり〜
まて一般の人の智愚賢不肖性のうへやうにかかる上より
物に賦与して仁義礼智之謂性の命やうの類也
気の命なり是朱子の説より出たる小説字義ふを伴

ふ論也宋儒理の命気の命の説大略如此〜
先儒理分殊の説とそらに〜物の上に物に〜その物
ゆゑんの故を考究真正理と名付用事に用ところ
のさま〜あるを気なるに理ハ一つにして気ハ多く実ハ
命に理の命気の命なる性ハ皆其の性なり
ハ多し孟子賢の書を考ふ何を気と説く理を
いふ〜〜それ人命に理気の説をとるべし所以
肩ふ〜〜あるべ人の志あるべ
先儒のさして理の命なるいふ又十紀て命の一名あり
集註云て命所て乃ち流行の職物者乃事物
當然之故や紀此則紀也を積る不惑又不言之言

命の字と解して物理に通ぜざる事なし。夫子五十の時格物窮理の功熟して。
万物の理を通じて天命を知ると云ふ。則大学の
の補伝ふいわく衆物の表裏精粗いたらざる
なく謂ふべし。然れども経書ふ知命ふ知天命ふ知
命ふ畏る君子ふ畏る聖人ふ畏る聖人の言ふ
しかつて。何も先儒のいわく気の命ふ
上帝ふ天ふ人ふ気ふ命ふ性ふ理ふ君子ふ
ふ。ふ書ふ易ふ詩ふ礼ふ春秋ふ孟子ふ論語ふ不知
ふ。先儒の説ふ聖人ふ天ふ人ふ命ふ知
命ふ聖人ふ天ふ人ふ命ふ知天命ふ
の奥底なし。人力ふ及ばざる事ふ

点ふ人ふ表ふ堤ふ堤ふして水ふ多ふ流れゆくふ
胸中にとどまらざるふ水ふ流れゆくふ
とどまらざるふ水ふ流れゆくふ人ふ物ふ
を知ふ人ふ気ふ命ふ知ふ天命ふ畢竟ふ
とどまらざるふ知ふ命ふ知ふ理ふ命ふ
ふ。ふ物ふ理ふ知て命ふ知ふ気ふ命ふ上
や万物ふ理ふ知て命ふ知ふ理ふ命ふ況
ふ。ふ先儒ふ注解ふ理ふ知ふ理ふ命ふ
も正ふ文ふ知ふ安ふ命ふ物ふ病ふ
聞ふ。ふ文ふ知ふ聞ふ知ふ聞ふ
中庸ふ首章ふ命ふ謂ふ先儒ふ理ふ命ふ

いへり。章句に天は陰陽五行化生万物気は形を成す理は
賦与す命令やうに出れば理を受けて生ずる命令云
人は生るゝに性とりてとりてとりてとりて人君の命令成る
下の万民上は職分をつとめ人の性の身終
あるとことを不婦して色はてのあるものといふ人のことを
て。命の字のもとは口と令とを合せたり賦與のことをいふ
魂魄家人形をつくることを相ちがひ出れば命安命の命
指は見はるゝ。惣別文字は屋字あり實字あり常にて
命といふは実字の中庸にてのあるものといふことを屋字
あり。混して見るべし次
孟子の仁義礼智の一章。先儒の説に気の命ずる智愚賢

不肖うけるの不同あることをいふことをもまた云次。惣
別賢愚の五常命令にはいふ。古曲徧徧人のあるこのあるこ
はあるこのあるこのあるこの性分のさまざまあるこの性とのこと
ひとつ命といふもの孟子の此章も父子君臣のうへ行あるこの不肖の章
不肖とは命令の性分のことをいふ次は章性と命とをちがひて
説ども而説は理と気と性命の上をたづねる説とあれども
文は何も気の上より論じたるこの章と説べし
詩の周頌維天之命の篇よりいふ。維天之命於穆不已と。中
庸より出たりとなり。天の運行して穆穆として不
已。文王純於乎不已。朱子は穆を解して云ふ穆穆有動
輝光と。命とは流行やすし。程子の詩経中庸にて

て於穆不已とつゞけ陽の流行万古やまざるを申くいへる
字解のごとくにて命の字と以て為とし流行と
作る勅孫とゝく何も陽湯往来の理をさして天命とゝく
詩の本意にあらず六経よりも天命をとゝく何も古の猶福の字
ゆゝしく陽のことを命といへり周頌の詩のごとき
毋忘文王の盛徳廣大なるを福とゝくこゝろの福とゝくこゝ
ろゆゝしかるべき帰彼〜子孫繁昌
して万世ゆるしたまへるを穆穆と於穆不已とゝ穆い深
きのことなり古の詩経の本文をゆゝしうする
ふいうゝ於不顯文王之德純假以溢我我受以燕恵家
文王の孫篤こゝろへつゝ即位樂の詩いうゆゝ保右命之自天

申ゝのごとくゝ陽流行のもとゝよあらず中庸ふ引
用ゝと猶善猶淫のゝもやまうとゝのたまうゆゝんゝ
名字書と熟讀とゝ
経書よりゝ命ゝとゝ
ゝゝいさゝ陽ゝゝ乃程ゝ
い必猶あゝゝ出ゝさゝ陽
若猶淫ゝ出ゝ
たゝゝ行あゝゝ
かゝゝゝゝれは皆ゝのゝ
ゆゝ彝禹の位を得伊尹傅說の相位よあゝゝゝゝ
乃ゝもゝゝゝゝ命ゝ孔孟の不遇伯夷の餓顏回

の窮。伯牛のやまひのごとくなれば命にいはんこと
いひがたし。故に孟子にたとへ人の徳を
ていの者をとらへていはんにあたりてもすべからく
よろしきまにして賢職訪窮の者をあつめ命
をつかはすべき者をえらぶべし。詩経書経
詩経書経よりて命をつくる。論孟をもつてもつ
あらそ義の美あるをあらはすべし。詩
経書経よりあつめて命をつくるの上すでに
とつあつめてあつめて命をつくる。保佑命を自天申
そつかはす国維四邦を命惟新なるこの類何もあるべきこと
て命をつくる書経の大命汝傾乃隕厥命なるこの類何を

あつめて命をつくるべきや。大学の康誥をはじめとして
不于光乃身則得之不善則失之をはじめとして
あつまること。論孟よりの人物の
ごとくなるべし。命惟新なるこの類何もあるべ
ていの者をあつめて命をつくる。知命安命をもつて
かたるべし。伯牛の疾
と命とをかたるべし。厩舎の焼けたるのみ
一あつまるべきはあつまる。詩経書経よりの多くは天子諸侯の死の上を
下に家の存亡ありてはじめて天下と得。天
のごとくなるべしてはじめて天下と得。天
者あるべしは冥加なるべしひとしからず。

論孟は人の道を説き人の
命を知て天地造化の理を
窮め衰微して福せざる人を
救ひ絶学して詩書の
絃歌を興して天下を治
し給ひ詩のうちに完命不
易といへり又孟子に堯舜禹湯
文武は性之なり五伯は
借りなり
天地の命を知て用ひ給ふ
人の性は善なり
堯舜禹湯文武の聖人
は命やうやうに
天地の命を知て
人の性を
尽す者
堯舜禹湯文武
は命やうやうに
天地の命を知て
人の性を
尽す者

半の去る所猶猶として
あるを切に
天地の命を知て人の性を尽す者
堯舜禹湯文武は命やうやうに
天地の命を知て人の性を尽す者
不肖の人は性を
堯舜禹湯文武は命やうやうに
天地の命を知て人の性を尽す者
堯舜の子は不肖にして
堯舜禹は性善なり
堯舜の子は不肖にして
堯舜禹は性善なり
堯舜の子は不肖にして
堯舜禹は性善なり

仏方ゥ拓さいてゝとて〳〵ゥ伯牛のごとく賢淑あゥ人も。牛生
れと洗〳〵ゝ絶とゝれゥて。元憲の貧ひあゥ者〳〵ゝすゥ。
独ゥふゥゥらゥ悪疾よあゝゝいゝゝ。ゝゝゝ

安対輔中人以上仮安於命到得望人役不得得富貴。
諸類小得分。心之所望人不知不得富貴。
とちうこれいはゆる諸侯諸卿あるものの命
あるこゝとをもれども多くは計謀を運して命にまかせも。
中人以上はうらくの命のうへをうらくとをもうこゝろをや
もんす。望人はうらくの義は安して命をいうこゝ
とをまこゝとしこのうへをうらくをもうこゝろ
あるをいはゆるこゝろ中人以下はうらくあれども
る上にはせんこゝあれうらんこゝとをもうこゝろのうへ。
こゝはうらくをもうこゝろ望人は君子の
とのうへこゝあまこゝろうらくを命と安んこゝろと望人君子の

拙切こゝと中人以下のこゝあるはやこゝろうへあやはうあり
子服景伯彌子瑕こゝあるは命を說こゝろ皆中人以下のこゝあるこゝ
こゝろうこゝなるこゝろ子服景伯は中人以下の人こゝとして
爲こゝ。孔子こゝと不知命安以君子やこゝろうこゝ。君子は易以俟命
こゝろうこゝ。孔子有命。富貴在天こゝろ。孔子命をいうこゝ
こゝ。皆中人以下のこゝあるこゝろあまこゝ
辛こゝ云。中庸は邇世不見知曰不悔。唯聖者能之こゝの類。
命こゝろうこゝ言聖人はこゝろ。何を命と安んこゝろのこゝ。望人の況
位こゝ。中人以下のこゝこゝあるこゝ。又孟子は孤こゝあるこゝ。
こゝろけ意淺こゝ。孟子は。孔子は不得曰有命。曰王臣瘝
侍人齊環。是こゝ義を命やこゝ。これは武人孔子の瘝瘖侍人

あくのことをしるしてあらはしてふるまふこと孟子の言に孔子の門生三千人と云へり雅言
詩書執礼の教あて說授し給ひたる仁義の道をもつぱらとなすべきかつ孟子の書に猶福のこと
ふくは毒命とのこと孟子の書に
しるしてしるしあり孟子に孟子の言に
孟子の書に
孟子の書に
孟子の書

ふたなりなり。志ひくきこゝろのことのそむひ。家よりあるくゝ義よりあるゝ
ゝ。彼りよりあるくゝ命より生ずるゝ。義命やとゝ人ゝ。
志ひかくゝそなりなりと志ゝ人しゝ。先傷命とゝなりくりんゝゝそゝゝ
故ふ。義の中にあるゝゝゝゝふゝあるゝゝ次
孟子云。盡ゝ心者。知ゝ命。存ゝ心養ゝ性。所ゝ以事ゝ天也。夭壽不ゝ貳。修ゝ身以俟ゝ之。所ゝ以立ゝ命也。
の比干のゝゝと拳ゝ。命ゝ正命やゝゝ問。孟子の意ゝ言ふ。固
是正命ゝゝゝ。又問。以程論ゝ則謂ゝ正命ゝ以ゝ生論ゝ則
非正命ゝ如何ゝ。又言ゝいゝ。當ゝ不ゝ知ゝ知ゝ命ゝ。
如須臾活看。志ゝ上ゝ論ゝゝゝゝゝゝ。
ふゝくゝ義ゝゝゝ命ゝゝゝゝ。混合ゝゝゝゝゝ比干のゝゝ
紂成湯ゝ家の臣ゝ仕ゝ忠言ゝ用ゝ。志ゝ也。志ゝ世

ふひろまりつさふ。罪惡無ゝ紂盈ゝ紂辛ゝ世ゝ出合ゝ。ゝゝゝ紂
て志ゝゝゝ。志ゝ比干の命のあゝゝゝゝゝ。比干
の成ゝゝゝゝゝゝ

生ぜざる禍福皆天命惟真に致る者乃ち正命なり。
されば人々何ぞ人のあるも人の皆天命
なり。然れども命なるものに二あり。
一は世間のことに毫も人為のあずかるところなく
ただ人の悪風とりそけ善行のつ怠
刑罰なくして命なるものに悪とし
なるものに悪風なるもの命
て優渥の雖あれども常に困窮して救ひなし
のごとき命なるものに拉摧して全くなるを
あるべきなり。命なるものに正命あるべきを
孟子下の文に殀寿不貳修身以俟之者正命也拉摧死者非正命也

つとあるのみを命なりとす。命なるものに内なる正邪正の別あるべ
きなり。拉摧死するものに公法長の課鍛ありるの類を例
罪なくして死に至るべきなり。
あり。罪あるべく拉摧せらるべきあるべきひ訴の間あるべきなり
命なるものに邪あるべく死するものを
なり。讀者たる人莫邪命なるべきの二を見るべし。何ぞ命
のなるべき世人人為のなるべきを修身つるべきなり
あり。
或人のいへる。不善人の禍を受けざる人の福を受けざる人
なるべきなり。ただ善人なるべきなり。
善皆人為なるべきなり。

徳をハ罪あらしめ孔子ハ命なしとの者と命なしの人へ〳〵ゆゑんを孟子に
きく猶編愛不自己求者と者と莫那命也と〳〵いはのこと
なり人〳〵に曰ふ徳〳〵を孔子伯牛のもとに執く亡命矣
所人やまひ疾この人に曰ふ伯牛ハ人〳〵に伯牛ハ
て命なしの人〳〵伯牛のごとく善人〳〵に善人ハ
きこれ疾よあくこれ人なるあり命〳〵いふ事ハ
あり徳をハ何ものゆへ徳をいふ命〳〵ハ
あるまこれ〳〵あり命にて出もとゆゑんなり善人ハ
さこく皆命あり舜〳〵孔子〳〵に堯舜ハ堯の世に
生れ堯の位と踐孔子ハ樓〳〵して一張一弛舜より
むかしあるふあり次孔子よさくるこくあるふあり次して

疾達のこくに曰ふ次に〳〵あるこの小命〳〵
あり〳〵の刑罰あり〳〵命法こく天罰あり〳〵
このあり書経に〳〵有夏多罪天命殛こくあり
あり〳〵の徳あり〳〵に孟子〳〵あり〳〵幸〳〵
論語に〳〵あり人之生也直罔こくあり幸免こくなり
を修例推を〳〵
或人又いこく或人盜として人と
いさこれて刑にあひ一人ハ幸あり
これ二人〳〵ふあり〳〵皆命あり何ものあり命を
まり〳〵や曰ふ事をまこくこれのたこくの〳〵惡風とみあり
事とてこんにあまこくこの人の中ふ〳〵たるものをあり

知わきまえたるものもあり。物あるゝを表くれたるゝとあるゝを。
強きをゝを悪風よハ無くつゝ人とのほのゝと考うるゝのゝ
いゝとハゝつゝ物ゝ知とゆゝくゝゝひつゝ〳〵。強きハ形よあゝ紙
知うるゝ〳〵盗賊ゝとゝも本〳〵考うるゝ物ゝ命ゝいゝむやゆゝん
ふ知命者不立乎巖墻ゝ下ゝ〳〵つゝ者ゝ少ゝ明ゝゝゝや
知命ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ物ゝ詳ゝ考ゝ論ゝ孟子ゝ知命者不立乎
巖墻ゝ下ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ命ゝ考ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ考
ゝハ盗賊ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

小侍従殿とて人の子にはたらかせ給ふに成湯の顧諤てふく命をはしめ
切なるものにて成湯の顧諤てふく命をはしめ
まくせうこの顧念表正にてこれの冥加ようあへやうふ成を
法しるしなるにてあるべし先傷ひとる上なれ事をこそあへり。
畏しいひ顧ふこと皆家ふ性よ同と法ふるこふ解せらる。甚
方ことよそむこそ
論語孔生有命の註よ。命ハ稟於有生之初ハ雖然
あるべしこの論孟字義よりもはしとは雖にはしらくこの説の要
あれいかに同位るも孟子の賢のこをいとこ
よ虚実ふこふ人あるひはこれをうあるこを出を命ハあへ
ふこふのこれよ然くいひそるものとうふこれのこをめよ解

解せらるいとくこそ扨ふ法謂及ふ法ふ
そのハ久しくあるこそ法ふ不の教ふ
換ふ孔初ふを定ふ人生の寿夭も強弱よふくこ換ハ
定ふ人生の寿夭も強弱よふくこ換ハ
いふこれ吉凶禍福生死寿夭の定まるこれよ
て死ふこふこ人賢者ふ人ふこ吉ふたまふこ
平生死と法ふ欲とふ命とふ
ふこふこふ故よ孟子に曰天寿不貳修身以俟之所立
命ハ心有生の初よ定ふ法ふ換死の命ハ定ふ
ふのハ何ハ用ふこ天寿と法ふ考法命
ふ定ふこふのハ何ハ亦ハ少の寿生とせ

ことを百家の說となすべきなり。賢愚知不肖の上にいたりて
ことに至りてはあるいは生れ付きたる命といふものの何程なる間
修為次第にてことをとりもどすべきものなり。されば孝子
のごとく世々にいたるまでもいかほどの異意あるべきなり。
その孝子でも害あり。是孟子命前定の說よりもなほ
意味あることなり。されば命とは人のいかほど発奮すべきか
みちなり。常に己を慎しむと知命とは立命ことに有生
の初より定まりしことなるべきなり。されば孟子の
訓幼字義巻之一終

訓幼字義巻之二

道　凡十七則

道とは人の行路のことなり。人の往来通行するところのみち。
唐の十道宋の二十三路。　孝経の八道の説は上は王公大人
の孝行より下は販夫馬卒のいやしきまで賢愚老少とりて
ともに一様に往来奔走するところの大道とかたづけ人道とかたづけ
ともあり路の義とかたづけ名付けたるものなり。彼の仁義礼
智乃ち五倫上は人君より下は庶民にいたるまでこれを
知ることなり。孟子曰ふ若人路
絶し中庸に五倫の交とあるがごとく人のたがひなく行ふべきこと分明なり。法世とは律令にて

あり。又性の良なるよりもまことの人とは何をもとゝするをもまことゝ
をもとゝするにあり。聖人のいまだ学ばざるの人とをもとめ、又倫とあり。むつまじ、党のまじわり、舜、政をおこす。
そもゝ礼と楽とを学ぶ。人倫の乱れを憂ひ、言語を敦くし、典を
在寛に書経舜典よりあり。又典とは常にいふ。典は常にいふ
て、又常、倫とはいふ。君臣父子夫婦兄弟朋友の六つの
交りを不易世にいつまでもかはらぬことを典と云常と
いふ。孟子に五つ。その條目を詳にあらはす。親義別叙信
とあり。君臣の間にたゝひよ義はたゝく交るべしと君臣の義
はたゝ父子の間にたゝひよ相親はたゝ父子の親とあり。
夫婦の間は内外の差別あるべく相離れべからざるべしと夫婦の

別とあり。兄弟の間は年の長幼の次第をたゝしくすべしと兄弟の
序とあり。朋友の間にたゝひよ信を守りて言行よ相違なさ
ずべしと朋友の信とあり。これ五倫の人あまねくあまねく。
此六つの中に君臣父子夫婦の人あまねくあまねく。
名目をあつるべし。又儀は十倫にあり。故に中
庸にはこれ六つのものをもつて五倫の和よりいふ。故に中
五倫の和よ又仁義礼智とをもつて五倫の和のような
てをもつて五倫を分ち仁義礼智はひろく人の上をもつ
てをもつて仁とは人を愛しむの心なり。義とは
かりそめにもこれを行ふべきの理なり。礼とは
是非を分ちこれを行ふの礼なり。智とは
是非を分ちこれを行ふの礼なり。智とは
是非を分ちこれを退揖讓の節をもつてこれを

国立国会図書館蔵

うくるの理智にして是非善悪を弁別するの理あり皆人の
行るべきあるべきを上より法令を以て
きハ行るべきも人の知ること行ハれざるの善ハ皆乃ち
天中は四つのりのハたを大もとに統べ
下の大たるべし
乃ち別体のるゆあるとハ法あるべし天下公共庭の物なるべ
下千百人のこゝろをくよ行ハるべきこゝろあるべ
きものなるべし日用当然の行の上よりあらはれ出るべ
きれい人ありてこゝろ不ふるうこゝろをたゝしくひ〻堯舜
の授受ありこれよりたゞ先執中一つの字ひて仁義
乃ち来あるべきなり法堂に相うるべきこゝろ孔子の言仁

智勇の三ひ孟子ハ仁義礼智と為挙られて法堂に
明あるべ堂人上よりるまるとこゝろにいたれとものくて下のひとを
却人こゝろひさぶれなたるこゝろ乃ち堯舜禹湯文
武の代是なるべ世乃ち善徴して堂賢位と法にいて下り
あまね行却人と絶こゝろくてあるこゝろ不ふるべく家庭の間。
ひそ〻不相接ずして其堂人の乃ち心は志の人にいたれば
修べ却孔子孟子のこゝろ孔子と孟子乃ち之謂義
こゝろ是なるべ乃ち撫こゝろ人こゝろ法世よりてもの世この法
度あるべ善悪邪正さるべくあれこゝろ当代の人乃ちこゝろ不ふる
こゝろ人ハ是又こゝろ人の乃ちこゝろ人ハ乃ちこゝろ不公共
のものなるべ自己一人のこゝろ法るものあるこゝろ

うるう

宋朝の朱の先儒。乃とりてこゝに墓精微をもつて。日用尚強
のこゝろをもつてうるおせるゆへに。おのれ乃の用をこゝに極
れあるゆへ。ゆりひ。そ上面よりかゝるゆえんの故とのりうを
とりの字作しゆへ。てうを在くい命ゝそ。人よ在くい性ゝそ。物
ふ在くい理ゝつ。とへうくを名けて乃術ゝそ。まこと云
物の本体ゝつ。同よりて人身よりて。ものゝ事ゝ。ものゝ理ゝ
て。地万物是ゝよりうそれいてゝ。故日。乃ゝ本原出於天る
ゝ。ゝ。ゝ。作徒千己ゝつ。ゝ。ゝ。皆佛老の説ゝ。渕源ゝ。
つゝ。ゝ。人のゝ。ゝ。題跋をもつて。ゝ。望人の乃と倫す
へ。人倫日用ふいてゝ。物ゝ。ゝ。ゝ。

論語よりて在川上曰。逝者如斯夫。不舍晝夜。集註よりて。地
ゝ化。往者過。来者續。ゝ。息ゝ。停。乃。作ゝ。ゝ。程
子曰。ゝ。乃作ゝ。又曰。自漢以来。儒者皆不識此義。ゝ。此
章ハ。流水の日夜流行して。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。

万物の主宰なり。孔と名付くる所なり。深廣の法蔵なり。その説法
易あり。しかるに孔孟は佛老見得世界象蹟畫人一般。佛老畫得世模
樣。儒者畫出全身相着。如何教他兩眼不做主人。
意味の妙なり。孔子孟子のかふ。佛老の二氏畫を描
くと見得く。深廣の儒者はそこまで見得どころなり。孟子に徐
辟の仲尼水を称するを見るに。原泉混々不舍晝
夜。盈科而後進。放乎四海。又能拔之。
の二字ふ。徐辟の病をうくかの。孟子称の本
を示あり。孟子にをけてあり。朱子の料簡ふ。

孟荀の語或は傳聞ふ。孟子の説は
の旨まあきらかなり。荀子は
論語曰。志於道。據於德。依於仁。游於藝。
德知德。居仁由義。好礼等の
は徒らに気稟物欲のゆえなり。
を知れりとなり。強ふ仁とは
はたらくは歌詠とくかて。表
一言ふくもむてとは。
もはは正しきを使ふ。
しかるに聖人は
人をあるいは

少きころ血気いまだ定まらず戒むべき事多し成て血気既に衰ぬれば戒むべき事多し血気既に衰ぬれば戒むべき事多し

親族離散して故旧に遇ざるなり

乃志を於乎に寄せ身を田園に委して年を終るまでいとまあり

論語に富と貴とは人の所欲なり不以其道得之不去也

職是人の所悪なり不以其道得之不処也

年生の道は富貴の上なり万物の生ずるに及ぶべきなり

のべて言はんにたとへば人の富貴なるがごとし

もしこれを求むるに道を以て求むべきものならば

の事なり富貴は人の所欲なり

を求むる術を君子は知らざるべからず

行家は世にあるべきものにして万物の生ずるに及ぶべきなり

富貴は家に生れて

去ることを辞して去らざるべからざるを貧賤の憂とす去れを其身にひて辞

しりぞけ故に不以其道不去也不以其道不処也

しらべいかんぞ乃義や此章にあらざるべからざるを

去ることを辞して君子去仁悪乎成名無終食之間違仁造次

必於是顛沛必於是

顛沛必於是とは無を義や邪を義や

仮にも下弗顧やいまだ即ちこれを

是の言を伯季子のごとくせず備侯の家に生れても位を

しりぞけんよりはこれを他国に

ふるべきものにして草廬陋巷に居るべきものなり

人に季氏の如きことをせしめ去れその貧賤

そこなうべからざるものなり古の聖賢の法

て見るべし。先儒の說まくいろと富貴を得ざれば得るべ
し解せり。人身はまりて天命を得るの乃あり。博
奕飲酒は貧賤とうのの乃あり。それ有る讀もかりそれを上
下てまりてそれを以て世を化れは物をそれをみくせそれを
さ次しまりむてまり。富貴はこうんをしてそれは物を極さ
をはさるの。貧賤はこうんをまりしかし。君子の上は得まりれ勤みくも
物まりしく。集註は審安貧樂道。安貧樂道。語類は安貧樂道有安語。
貧賤只一路しまりまりまり。德れも安貧を得るの乃をしてこと
はまりまりまりまり。貧賤と得るの乃をしいまり。博奕
飲酒はたくひと貧賤と得るの乃をしいまり。それはたく
富貴はおもしろ貧賤とうの乃ぬれと得るの乃よあり。その上

四說の毋うはくは富貴の上はあくは不義をして自くして物をと
しひはまりしそ得るとしは義はあるはは義文義のたるひ
あるくは乃の字は今是はの大義はあるれをはのとしはは乃を
て同あるくしてまりしく此章はあるは決てはくう
く論しは及るはまり

易の系辭上篇に形而上者謂之道形而下者謂之器
はれはまりは乃は形而上者謂は道形而下者謂は器
下者は程則乃は又は極は形は上は乃は陰陽
形は乃は是は說は太極形は上は乃は陰陽
陽は氣は乃は陰は形は乃は陰は意は陰
は同は乃は耳は乃は乃は乃は乃は乃は乃は

形ちの上の方に強れしを剛といふ。剛は強れしを剛といふ。剛は強れしを剛といふ。剛は

あるいはその中に子思の所引に世間法に出でて人に奇
異隠僻の行をなすこと或は山林に居て宗旨
とたがへ人の行ひを正行とすること何ぞ行ふ
是非とたがへて天下の法に背くこと
人の行ひを人の性と相違せり二字を加へて相違
せざるは正行なり然るに人倫の君臣父子
夫婦の間だに相和睦して愛敬を尽すべし
食と渇とをのむに人の志をもむかしこれ性のたのしむ
ところなり人の行ひを人倫用と事とすべし
上は礼楽文章を加へて万物の霊たる私を行ふ
らんとすべしあるいは性を尽さざるの人倫
それ人倫の法にあらざるを山林に居るとしいへ
たの人中にくらしこのむものとあるをもて天下の人をふ
るまひにせざるこのむこと尽さざれ性のこのむ所
あるをもて人倫を性を尽さざるの人にいたるを法ふとして
乃ち邪淫妄語をほしいままにして人の乃ち正乃ち
決絶ちその人に佛老の人に牛ちたれども長沮桀溺の
ごとくなり世間の交りをいとひ独その所をたのしむこれ
を乃ち知りひとり人の乃ち邪を知る世間の人を
ひとり何ぞ正乃ち何ぞ邪乃ち人と
て邪正をたがへんとあり中庸の書にあるごとく性を
くみの教へ人これ乃ち自ら知るべくして説あるものなり性

それ人倫の法にあるごとくこれ山林に居るとしいへ
たの人中にくらしこのむものとあるをもて天下の人をふ
るまひにせざるこのむこと尽さざれ性のこのむ所
あるをもて人倫を性を尽さざるの人にいたるを法ふとして
乃ち邪淫妄語をほしいままにして人の乃ち正乃ち
決絶ちその人に佛老の人に牛ちたれども長沮桀溺の
ごとくなり世間の交りをいとひ独その所をたのしむこれ
を乃ち知りひとり人の乃ち邪を知る世間の人を
ひとり何ぞ正乃ち何ぞ邪乃ち人と
て邪正をたがへんとあり中庸の書にあるごとく性を
くみの教へ人これ乃ち自ら知るべくして説あるものなり性

の理と云ふなり。次此上の句は人の性にあるの宜しき次に或は
矯揉作為して生ずるものなり。故に相遠とも云ふなり。
是は。ちがふとのく又一言にて命を謂性と云ふ。性とは
人の身体に生れ付たるものなれば。ほとんどの賦与なり。
さいはんは。ものと正しくとなるべく。明なり。世の人
此章の云ふ所は性とは。ものにて。就て云ふなり。
きあり。此一段性乃教なり。人あり。性とは。ものにて
乃ち。ものにて就て。ものなり。それゆへ。第二章に。
乃ち者不可須臾離也。可離非也。と云へり。
不善人。人なる乃ち善人。不可以乃ち。人のなひあるなり。
後世儒学盛に行るふなり。性の就て。傷者也。

就て。ものにて。性の身体に生ずるものにて。人の性
は乃ち未性は未生。性は生にして。乃ち。未来。
象と云ふ。望人の乃ち。あり。次。
性乃教の二つのものは。門学問の括例なり。意才情のたくひ
皆性の属なり。仁義礼智の二つは皆乃ち。
を人なり。性は人は良田の。乃ち。人は加穀の。加穀を
ものにて良田にまかせて。乃ち。人の切なり。それゆへ孔孟生人は
と人なり。人は乃ち。志就乃ち。適乃ち。
ふたつにて。ものにて。なり。孟子のこれにより。自暴自棄乃
後者。家形と見て。仁義礼智。
と。ものにて。性の善なり。皆人なり。詩書云

注あるこのこゝろあらんとこの三つのうちふかきをもつて人ゝ
あり。性善の說のごとくなるべし。性の自然よりさだまりていでゝこれを性と
教の三つのうちの只てるあり。ぱつちつて一番うつぱいんやなれば性古来
今自体のたゝりのあれば性ともうしくいはもさるこゝあり。爲と造
るふ。縄維準繩とゝるこのうちもまれ爲は親維ゝうちの。親維爲
ゝうあり。次のうちと性ゝうもうしてゝこれは親維は爲ゝうもうく
いへこゝこゝそれをあるこゝあり。漢の淮南王安ゝ淮南子よ。脩性
ゝ行ゝ謂ゝとゝこゝあり。ゝれもこゝあやはゝうゝ。ゝあるこゝは中庸
發揮ゝあり
性ゝこゝいへゝこゝの上よ然ゝこゝ。ゝとゝこゝ下の上よ然ゝこゝ。ゝこゝ
の上よ然ゝこゝ。ゝこゝこれは若ゝあれゝとゝ。ゝこゝのゝひゝあり

ゆゝ。夫子性相近やゝ云。孟子にて下ゝ性相似やゝ云。をゝ
云相似ゝ云。何もも大槩の說ゝ只一箇の性ゝこゝは地ゝ。
ゝ。下の上よ然ゝこゝ。ゝこゝは下ゝ今億万人の行ゝこゝ
しのゝ。易よ云。立天道曰陰与陽。立地道曰柔与剛。
立人道曰仁与義。でゝはひゝこゝ地もゝ二つゝ人ゝこゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。

ちからくらを性をひとつふたつ長別多く出ん法をもつて
性とあらそれ四人聖賢のたとへこゝろを多く性とこゝ
ろのふかく註せり孟子の一而已矣こゝろを素註に古今
聖賢本内一性あり堯舜を孝家而已矣こゝろと陳氏の
註に堯舜人倫を亦率是性而已とあれらみな古人の
とく人く法世の学者桐表あるこゝろ〳〵
聖人の乃ち上古の中吳国の風すゝて今日本の信ふかい
もとし世の人あり本こゝ傷佛老のこゝ人〳〵を忘物のこ
ゝろ一致に世つゝし世の人あり又聖人のたなられてこゝを
こゝを法世風信の世ゝろ人ゝる上に世ふかゝ人ゝ。
何をたゝくものと名別に世のひ古今水古の吳ゝく義理の

あゝこゝを志ゝ決〳〵て世くのまゝく世のひ博ゝこゝあり乃ち人
こゝのに本聖人の人思智愚と法くゝゝ人殺ら生たるものの
あゝ決て地月法の乃あり何そあれにあまくの人あつゝ世ゝ
中にに。この法ゝ夫婦あり父子あり兄弟あり朋友あり。その
内に理非を正〳〵養をたのむ人あれにあるふゝそ又
とのつゝ君長の乃あり。あれ老ゝこゝのに民あり。だひ博
ゝ上に人ゝをくにあゝをみゝく又決家程管あれにあるゝ
ゝゝ仁義礼智の乃世ゝれを世れに法古九引の内ゝゝ世くの
こゝあふあゝ決四方の国ゝ文字言語の相違せゝこゝも。
たをけゝむゝものゝに。とのゝゝひ乃あゝ決こゝこゝ。今
対西夷南蛮を北海の人ゝを。年ゝふゝ国に年ゝあつ

陶るとなく、淫乱の文字をもつて、党窟、国孔の名をもつて、その国々の前長、頭目の命令、紙うをもつて、別のものとなす。和睦して、変易往来するかの君臣朋友のなかあつて、夫婦のうへ、夫婦のうへ、父子のなかあつて、兄弟のなかあつて、糸をもつて、結ぶ人、国々、村々、淫乱に通、淫せざる国あつて、その口多かるべきなり。

結をもつて地の間よりあるものから、国（クニ）、郡（アレ）、多方あるものの、いづれもその世何をもの国あつて、その偏旁、とのくかつて、あつて、望人の名つけ、のいれを本にして、節、交係、国と立つるものの、即て地の間のなかつて、望人の、ある中、国の風俗、常、かの、あつて、又、四、数の人、いかなる、地の、一致、なかつ

とつかつて、後世、つ、嘉、なつて、何をもつて、一致、つ、人、ものあつて、望人のなかつ、人、の、用、暴、偏と、なつ、ものと、せんつて、家に在て、家と、治先、国、を、在て、天下に在て、天下と、治め、此外に、一、の、ふつて、乃、ものあつて、後世、の、用、学、の、の、ものと、立ら、なつて、ふつて、仏、老、の、説、と、偏、ひ、幸、つ、あつ、孫、近、なる、丸、真、つ、人、見、なつ、あつ、ものを、ふつて、老、仏、の、二、氏、は、偽、とひつて、ひつて、あつて、偽者、の、いつ、あつ、学、務、の、老、老、の、いつ、あつ、各、作、不、老、仏、家、の、いつ、あつ、本、末、面、月、つ、つ、名、は、かつ、老、つ、ものと、なる、乃、説、地、れ、つ、望、人、の、乃、い、暴、偏、と、言、つ、老、仏、の、二、氏、は、偏、

とのれ、世、つ、水、火、の、害、ひ、あ、つ、く、名、別、の、つ、あ、つ、偽、と、た、つ、人、あ、つ、と、つ、あ、つ、又、後、世、は、望、人、の、乃、行、人、つ、次、く

いへ自暴自棄の人の言ひたるこゝろなり。信士の道論ずる人の
のゝたゝかひをこゝに今日のこゝろ合ひかゝりたるこゝろ知りてよろこべり。
そは上物に盛るこゝろにはいとうたをくるゝとまことに喪ごろ時
いさゝか事をいとゝもいとゝ多くたゞ人にはあるべき業と用ひゝ世
ろこびたゝと多くさうん多く人よい業と用ひこゝとまことにこゝろ世こゝ。
そは喪世よい聖賢の名多くこゝ所にこゝにあるこゝ。春秋戦国のこゝ
さいこゝろのはそや二百四十四年の間に諸侯の国に弑君者三
十六人ひとの古地とこゝとあり人の業をうつしのこゝろ愛人こゝ
こゝとたゝこゝ戦国の世にあるこゝ多くこゝ多くこゝ多くこゝ時こゝ
上代こゝひこゝ今日の風俗に未あるこゝにあるこゝ多くこゝ
こゝろこゝ強こゝ孔子孟子後世に周流して孔孟と云こゝ

仁義とこゝろむこゝ何のこゝそや強こゝ孔子後世こゝ聖賢の名
多こゝ所にこゝ人こゝ気みこゝ多こゝ多こゝ或こゝ世こゝ
こゝ世こゝ草野こゝ長沮桀溺こゝ多こゝ或こゝ名こゝ人に
こゝこゝ蘧伯玉こゝ皆不仁の名こゝ。
出処進退の中に治乱盛衰の上に執こゝ。群砂料こゝ人こゝ
こゝ多こゝ聖に後の世に聖人の名多こゝ多こゝ
こゝ孔孟風俗のこゝ上世のこゝ呉邦のこゝ。十年
二十年のこゝ今日の風俗に未あるこゝ千里百里のあるこゝ
こゝ。呉の風儀こゝ多こゝ。呉国千年二千年こゝ
今日の日本に全く周の人こゝ。そは孔子も魯に在こゝ
の衣と服こゝ。宋に往こゝ章甫の冠と周の裏高周の礼儀と皆学ぶこゝ

生ることを喜ばず流涕しの面ふくもちろん強ることを喜び命じて。
傷者のごとくなる邪上世のことを全く関せず世ふるうて。
今日ふいあ[illegible]しし世人の続あるこれ礼とのいうちとも
されるるこのこのこの第右不易のこの世間無窮のの何をこの世
何世の世にもちろんて初めて孤ちすのの孤ちろく用
物ことを。志ゐるく用ちろ浪ちて程ゐ。又志ゐるく用ちろとてさ
てふあ浪斟酌接意してちろ孤方に法ちてさゐ
ごとを全くんは異ちろとちて孤ハ畢竟程は落ちく望人の有はあ
ちと。望人のいうゐちごとのちて地自然のごゐてて人あちくは
ちち先ちく出ゐるふあ浪たち人の楽ちとちてのハ人の苦言ちあち
出ちゐれちと。清酒ちゐ不の律ハて地右今の間はどの法ちく異ち

てあちゐちちちちハ人のちちち行ちちちちちちちち孤
全くんは異ちちハちゐちちちちちちちちちちちちハ
ちちと天地の内とのちちちちちちちちちちちちちちハ。
孤ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちハ。
出ちちちちあちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

もを事と称賛して天地古今の間よりあるものあれとくいへり。
ものをとなくこれをひくくしてひくくしてひくくして

星辰の運行は古今さゝ違うたることなしとぞいふ〳〵人爲造化
いとゝもあり〳〵学本の象拙を以て春秋を考るに人の世
の人推歩考究して竟象はかることを法則白ふして第世後くた
ひあるさゝ〳〵乃を其色うたがひて自然さゝ違うたること紙。
人の霊と行くたう命ゝあり人人全く異るの理あり
らと

異　竟乃ゝ人〳〵不作のとゞくと技芸の上ふくを等
乃ゝ乃ゝ人の類あり又所よりくいあ〳〵ゝを乃ゝを
ゝあり孟子に道二仁與不仁而已矣と云つゝ締結よ乃ゝ
不相爲謀ゝ人ゝ又雖小乃必有可観者等ゝ人ゝ大小邪
正の違あり人人ゝを大勢の人ゝ有ゝ人ゝ何

ゝ人ゝも乃ゝ人ゝ為〳〵統を物して乃ゝ人ゝ時は望人
の乃ゝとの〳〵乃ゝ人ゝ〳〵くして乃ゝ時は乃ゝ人ゝ為〳〵況
矣〳〵あり乃ゝの義大際ゝ人〳〵ゝ性の自然ふ乃ゝ
ゝ人ゝと乃ゝ云〳〵れは乃ゝ二仁與不仁而已矣ゝ人ゝ為〳〵況不仁
と乃ゝ人ゝ〳〵ゝや又性よ仁不仁の違の理異ゝ人ゝあり人ゝ人ゝて
ゝ人ゝ〳〵ゝかんや是皆不通

德　九七則

德ゝ人ゝ乃ゝ人ゝ〳〵基を〳〵。学経よ玄徳要乃ゝあり皆
学の中ゝとさゝて〳〵ゝ内乃ゝ人ゝ為〳〵ゝ上よ然ゝ人ゝの差別あり中庸に又倫の乃ゝと乃ゝ下の達乃ゝ人ゝ
智仁勇の三つのうちとて不の達徳ゝ人ゝ此名の交ゝと乃ゝ

爲一中庸ニ又曰て德之乃可一言盡や易ニ天地之大德曰
生と乃德の字を德の上ニ置て言を準ー志るべし
禮記礼運篇ニ德者行之得ニ於身一やと云れもろの字
の義と同ク大略ニ解ー たるものなり義ハ宜ニ通ー ス
ることなり朱子ハいろ〳〵既の字を〳〵字ニ〳〵有得ニ於身一
やと解せられ〳〵古人のなほあり次大抵古の書ハ名のりと
をせハ已ニ〳〵ひ既ニ〳〵ひ〳〵ん〳〵ニ〳〵の裏ハ少し後世ハ程の說さ
んあるなり此ハ此の說を文字と〳〵く註せられ〳〵ことあり
上の說乃〳〵くいつれハ德ニ〳〵ハ〳〵ものハ〳〵〳〵ハ爲ーて後有
得ることなり德を〳〵を德ハ畢竟仁義礼智の總名〳〵ニ不ー
世不可磨滅の乃理ニ爲ーて後あるなり次故ニ中庸ニ曰ク

德を生乃と並ハ行せられ〳〵ニ〳〵ハ說書ニ拠ニ於德ニ好德崇德知德
の類何も皆乃理を生ーて言ハ故ニ拠ニ於德ニ依ニ於仁ニ
あるこれなり次中庸ニ曰ク故ニ拠ニ於德ニ依ニ於仁ニ
得ニ於身ニ之一色の說也德の字を色ーて解ー たるものなり次
ハ〳〵ハ字ハ〳〵ハ行ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵

仁義礼智信皆人の性にそなはりて人の生れつきたる
志なり故に人人の生れつきたる性なれば人の人たる
所以なり物と物とに対して人の人たる所以なり
物と物とに対して人の人たる所以なり家と家と来
りて人と人とに対して人の人たる所以なり
む意なり人の平生業とする所なり
しかるに人たるもの物に感ずる情なり
て物に接する時に折に触て行なふ
孟子に言る気や配義与道とあり又言る道楽義則可以置
矣とあり人のたくひ皆そなはりて
上に挙る一章の夫子平生学者に教へ給ふ
同じく浅世人程の学盛んなる
繁多なれども頑鈍なるものもあり
上旧解の意なり志於道とは
学者に教へ給ふ拠於徳依於仁の二は有徳仁者の地位なり
て云わく学者名上より中に及ひて云へり旧解に拠徳と
解して云徳則行道而有得於人者也得於人る時
則始終惟一而有日新之功矣依仁と解して云仁則私欲盡
去而人徳全也功夫至此則終食之間則存養之熟安適
而非理之流行矣志仁とは

深の仁者よりあらくのちよ偽人へ推うへを
ふかく〜未仁あるをうらへたらうるかさかをうるあ〜を皆德と必行
ちうる深うし訓〜仁と私放淨盡の地位〜さてあらをてうるうあの
象有りて孔門学問の條目にはつよ事用の屋家〜なりうく。
せうたをあ〜只乃德仁義礼人の所と地さもう親維準縛〜
はりへ此一章は学者終身の工夫にて生熟ちふのかうあう
〜うへ〜をどの〜を意あ〜法〜〜〜
詩經書經よ多く明法〜あう大学文明〜法〜〜。
何をを空人君子の法あ〜あさうあ〜てかくをあれ〜と
あうう活せよんの拵〜法うんの義よあ〜法大推經書に德〜
いう〜多〜大法至法文法諗法盛法令法俊法〜祢とう

のたうひそ岩系法ちうくあう度ちあうとさ〜て大法〜云文
章あうとさ〜う文德〜〜何をを実ふ物〜ちれと称美〜
〜うをのあうくんの〜ふあ〜法明德〜〜をを意うあて空人
の法てうよ思うかあうくあ〜れ物あ〜〜あうとさ〜〜〜。
易晉の卦の大象に明出地上晉君子以自昭明德〜あう晉
乃卦は火地の象あ〜ふ〜て明出地上〜〜大陽の地よあ〜て
あ〜〜あう出の象とうん〜君子あ〜うをの自を德をあさ〜う
ふ法〜〜〜〜あう又中庸よ詩經を引く予懐明德不大聲与
色〜あう左傳よ臧文仲曰〜明德〜あう此ふ詩書左傳の内
ふ引〜〜〜何をを問〜〜〜宋傷行未ん〜〜〜
て虛妄不時異端理而應不事者やう〜〜空賢の旨り

そむくの詳なるこゝは大学完本にあるゆへなり或ハ道德
のあらはれあること明なるゆへなり言ハ如ハ言ハ如ハ
も意なの說とゝ成ハ大学の明明德のこと
述こゝ克明德こゝ書とゝ引ハ說ハ德ハ
明德と明なるゆへなるを基こゝ書ハ明の字
ハ明也明こゝ法ハ意こゝ法

理　元二十六則

理こゝハ物の法こゝめるゆへ玉を理の字と書く玉の
木めこゝハ說文云理治也也玉里聲こゝ也ハ紙こゝ
何ハこゝを法こゝのあこと理こゝハ易ハ天文地理こゝあるこの
文ハ日月星辰のあやあるこゝ地の理こゝ山川谷陵のこゝ

ハ人倫のこゝ倫理こゝハ君臣父子のこゝ
こゝハ人成小脉理腠理こゝハ經絡血こゝのハこゝ孟子
樂のこゝ法條理條理こゝハ音の若ハ如ハ
こゝハ人の上ハ理義理こゝ同こゝ
條理のハこゝ也こゝ理こゝハ強ハ
世のこゝ

後世ハ理こゝハ所古ハのこゝ他のハこゝ
第古優我こゝ
まこゝ陰陽昼夜のハこゝ第古往來消長こゝ
物ハ本のハこゝ第古生こゝ化こゝ
こゝ法こゝ

の〳〵なれとなかなく理〳〵なれとなれ又太極〳〵なれ則ちなんぞさ
物あり〳〵なれ耳よりなくてさるものふあり〳〵なれ形象よりて物あり
あり〳〵なれて〳〵色色物なれ則ちなれ又太極〳〵なれ圖說の註に上天載無聲無臭の実道化を極致
不量〳〵根柢やしなう。帝あり〳〵なれ形象の内なるなれ
となれ〳〵なれと無極〳〵なれ物の根本なれとなれて太極〳〵なれ太極の
外ふまれ〳〵無極〳〵なれのあるふあり〳〵なれ色物とあるせ〳〵いて
〳〵なれ皆此理あり〳〵なれと物流行一太極〳〵なれ物の上に結
ていて〳〵なれ太極ていて〳〵なれ則ちなれ少すていは微塵一蟻子よ
いて〳〵なれ〳〵なれこの理と異をとして〳〵あり〳〵なれ故一
物各具一太極〳〵なれ故に先儒の說に太極者理之異名〳〵

なれ先儒理の說に太異名あり
なれ〳〵なれ活世に理気体用の名分あり理〳〵なれは太極なり。
気〳〵なれは陰陽なり。是〳〵なれ太極者形而上之理也。陰陽者形而
下之器也故に又曰太極者形而上之理也。陰陽者形而
下之器也故に又曰太極〳〵と云〳〵此理気の二つの者なれ
一つ〳〵なれいなれなれと二つ〳〵と云〳〵なれ。気は理なれ〳〵なれ
気なれ〳〵なれ〳〵なれ太極者不離陰陽而為言亦不離陰陽
陰陽者不離太極而為言〳〵なれ〳〵なれ
〳〵なれ。馬の一お一入れ〳〵なれ〳〵なれ〳〵なれ〳〵なれ
〳〵なれ陰陽なれ〳〵なれ〳〵なれ。畢竟理気〳〵なれ〳〵なれ
なれ。羅整庵の困知記に理氣合一の說議論あり〳〵。朱子の說
と〳〵なれ〳〵なれ〳〵なれ〳〵なれ朱子の理気と二物〳〵なれ

なるべきことあり次に詳なるべし説話類と又人々
天の理氣あり人物ともに理氣あり中庸章句にいへり
天の陰陽又行化生万物氣以成形理亦賦焉大抵造
化の生物るに生の陰陽又行るに經緯錯綜又各以類凝
聚而成形焉古人の理氣ふたつに人と生し理は性と
氣はかたちと分て万物とすれども皆もつて所しいへし
あり故に理は一なれども氣のうへにかたちふたつに人と
物と正通偏塞のわかれあり聖人と庶人と賢愚智不肖とも
ひあり万物は雌雄男女のことあり故に人物理氣の說
かくのごとし

体用はいはゆる殺己殺の謂なり大抵解は乃一而已隨

事著見故有二才之別而統之中又各有体用之分要こ
れは主てこれを曰陰與陽主地にこれを曰柔与剛主人にこれを曰
仁與義これを曰中文武殺伐これを陰と柔と義と体と陽と
剛と体と用とこれを用と又中庸は表裏哀樂未發謂之
中殺而皆中節謂之和中や者てこれを大本や和や者てこれ
を達道やと章句に表裏哀樂情やを未發則性や大本
者て命ずる性なり乃ち体や達道や者乃ち用や情なり
まことに人の上に於て未發の性と体と殺の情と用と
程子の寂然不動と感而遂通と体と用と
らこれを用ひるにあらざるなり
これを体と

しらべ人の義あり

聖人のをしへ人のをしへ素の上より強くして用ひ強
氣偉用の義あり　志ある人の志
のごとく多くの人に見て義相應して合せざるべからず何
そなをいたる極まりなくして極はなれ初雖は氣あり初
にうまく程あり志ある人は志れ初雖とも
爲にしてこれを初雖とも色にして次ゆへよく極初
而生陽雖而生陰とは又偉用の義よりこれ雖
あるを偉とうまくを用ひ次志をはなれ初雖とはこれ
あり次して雖あるところとあるを用ひ程の偉あり此二句共あり
と先偽をくして此をうひあるく志は陰雖より偽あるしの

義あり偽とは志をあらはす皆後世より起こる故なり詳ふ
義あるをこと畢竟義有次とまわるを
先偽の義より初へらく程のは純雖とは
志偽あり氣より初へらくの義惡邪正さあるくまく初あり
次志を義又義有とこれ何をあれば物統体志
極まるくて地の中にあるこの此程とをあれば次しいてくあるく又
此程のあるこのあり　ゆへ
こは即程あり極まるを地の上より義あり人のあるを惡あ
つ　それ何にあり生次にくれば義はいろ程よりあり
皆氣にあるとは惡の氣にあるあるこのをのこと
をくの氣のあるくあること何にあるをたるあるこれ

ほよ歸せざるべしあるいは惡ならざるものはよい善は生
もろ〳〵人と惡の生ずる人とこの二つを並べてあるやいま一ツ孤
ふあるべしこの二ツ孤ツとなるものあり出生家産もろふあるべし
出生孤獨人のこと知るべきなり孤ツ孤ツとれば善惡の生ずること易
ぬるべしこの二ツ孤ツ寡ツ孤ツ寡ツ孤ツ寡

ゝろ有ゝしゝへ法世程をゝゝしひゝろゝ生ゝるゝゝゝゝ齟齬
次ゝゝゝあゝと免ゝ色ゝす。且ゝ紙乃ゝ色ゝ有れ共ゝ悪ゝゝゝ物ハ程
ゝゝゝゝ悪ハなく気ゝ有ゝ程ゝゝゝ色ゝ悪ハ有ゝゝゝ本有ゝゝゝ
物ゝれハ来ハ有ゝゝゝ本有ゝゝゝゝ下の物何ゝゝゝゝも来ゝゝゝゝ
有ゝゝゝゝ次ゝゝゝ又ゝゝゝ物ゝゝ

大聖に致知格物ゝゝゝゝ

あり強ふそなはちあく。「撥」は撥はらひ除くなり。因寄物の形をあらはすなり。「空」は空虚なり。人の高ふあるは偏に困のてふ物なり。「倫」は倫理なり。人倫の理なり。「倫」は人倫なり。

「繫」は繫がるなり。「繫」は繫がるなり。

寄理の説小物なり。「寄」は寄なり。「理」は理なり。天地の寄際なり。今の始終なり。

「地」は地なり。「鄒衍」は鄒衍なり。「赤縣」は赤縣なり。「中國」は中國なり。「物」は物なり。

九州あり。「邵」は邵なり。「康節」は康節なり。「依」は依なり。「地」は地なり。「依」は依なり。「氣」は氣なり。「人」は人なり。「古」は古なり。「今」は今なり。

「十二」は十二なり。「九」は九なり。「六」は六なり。「百」は百なり。「年」は年なり。「始」は始なり。「終」は終なり。「元」は元なり。「亨」は亨なり。

「撥」は撥なり。「量」は量なり。「臆」は臆なり。「想」は想なり。「信」は信なり。「如」は如なり。「在」は在なり。

ありたるなり。「説」は説なり。「之」は之なり。「物」は物なり。「又」は又なり。「物」は物なり。「説」は説なり。「撥」は撥なり。「量」は量なり。「臆」は臆なり。「想」は想なり。「如」は如なり。「在」は在なり。

「この大千世界の説あり。「此」は此なり。「土」は土なり。「小世界」は小世界なり。「南」は南なり。「瞻」は瞻なり。「部」は部なり。「成」は成なり。「住」は住なり。「壞」は壞なり。「空」は空なり。

「劫」は劫なり。「今」は今なり。「日」は日なり。「住」は住なり。「劫」は劫なり。「世」は世なり。「界」は界なり。「中」は中なり。「有」は有なり。「人」は人なり。「民」は民なり。「居」は居なり。「之」は之なり。「説」は説なり。「如」は如なり。「在」は在なり。

「説」は説なり。「言」は言なり。「ひろ」は ひろなり。「ゆく」は ゆくなり。「又」は又なり。「説」は説なり。「ゆく」は ゆくなり。「世」は世なり。「界」は界なり。「説」は説なり。「又」は又なり。「説」は説なり。「有」は有なり。「大」は大なり。「千」は千なり。「世」は世なり。「界」は界なり。「説」は説なり。

「説」は説なり。「有」は有なり。「又」は又なり。「説」は説なり。「物」は物なり。「理」は理なり。「物」は物なり。「理」は理なり。「説」は説なり。「物」は物なり。「理」は理なり。「説」は説なり。

「説」は説なり。「物」は物なり。「理」は理なり。「説」は説

しるべくせるまことうの行あるとても此一箇の理をしることさ
つ窮めされい。學問は須腦をくだくべき中にあり紙
いとうとくしてこうふたつ漢研究の學者は酔
生夢死とこそ。理とまことうふうの生の間と夢の中にあ
しつてこうの格物は覺閑誠意は人鬼閑とつるを明
てこうの。物をこうを窮人のこと辞論こうをこうり。
たまはあつ孔子の門は格人は先傷ちつ人は後ちふ窮
賢大学の旨と学ちう人あれは理とれつるちう人し窮人
のそもくに辞論こたまつをこつりつそのこの士大夫管仲
子產蘧伯玉甯武子臧文仲孟莊子の徒は聖賢大學の
旨とさくく格物の境まつうたる人はあつ物をこうを論語

ふのとうこうふとうこうふとうそれくる辞吊あつくく或はその仁と
ゆゆ。或はこ智とゆゆ。或はこ孝と許こ。或はこ君子なる
こと許こ。概は酔生夢死の人ここて出れと法こらしも。
物をい今日の人こくも例と物を格物學と法ちくく世間利益
ある人はこ才德の淺深大ある者ちくくこ学を稽と爲こ。
聖賢のこ人は事業を物こくの爲ちくくこ今日の上ある物
てこう人は對こて忠と法くせい忠信ちう親こ對こて孝と法く
せい孝子ちう。雖曰未學吾必謂之學學とくく學問とせ法こと矣
物こ人あつこ上はこれとこう法こ。
こて學問は須腦ちくくこ佛氏の書こう出こるこふくく古人聖人の書ふ。
体用のこうこくく佛氏の書こう出こるこふくく古人聖人の書ふ。

りくらを競ふ〜を詞のようく出るを体といふ。
そもそも人の形体のこと耳目鼻四肢百骸のかたちをさして
易しいう所体を易体といふ。是を大体小体といふ。其
体而微〜云。若移氣養移体〜云の類ひのこれ何も形体の
こと多くは是を万物の上に用ひて人に本然物名ふいたる
方圓大小のかたち目に見るべくまたこころのかたちを
体といふ。詩経に采薇采薇薇亦作止と云ふ。采のこと
ちとこころ。体は例を以て是を理とさして体といふ
きこと。十二経の内一経を又人とも又用ひていふ。易の象の辞に
多くあり。或は用〜云。或は義用〜云。卦のはたらきをいふ。活世
の体用の謂と相似たり。体用をはたらきとさして用〜云

体くみて理体に対して去来といふなり。活世にいふたる
つ〜体用の二つと区くるなり。寂然不動のところを体
〜感而遂通するところを用といふ。去来を万物の上にと
〜ひいてこの形乃蒼〜たるは体のあるいはその萬古獲棄〜
て不生不滅の体なり。地の形乃博厚なるは地の体なり。
萬古持載して不生不滅なり。地の体なり。人の形乃然〜たる。四肢
百骸の異りたるは体なり。此人の寂然不動のところ人の体
なり。去来と万物の上に然〜たる。万物の方圓大小
物の体なり。人と物と異るところの理即体なり。皆是
真のところとさして体〜て。形体の実なり。体の実なり。
義と皆〜去来なり。物の人或は物のかたちと体〜なり。

をけるこれを用ゐて俳諧とあくまでこれ始りなり
八日本にてはこれ連歌なりこれ人の俳諧にこれ
云ひしを俳諧云流ゐ云波ゐ云の類を用ゐ云ひも古の書よ
りこれ出れを現在あるものあくまで字義にたがはれたるを
多し然もこれを宋書よ俳諧といそうあるを上よりて
是の朱熹已熹の日書にこれ出れ者あくんあるべし
程子の易傳序に俳諧一涂顕微無間云ふあるに佛語
あるべ唐の中庸清涼國師澄観これ俗の易經の疏よりて
尚直編帰元直指等の書よりこれを以て此類のまく易佛書よ
多くあるべ又程子の云ふ沖漠無朕易象森羅已具已爲
不見後來爲不見先これを上の語に用ゐ程子

たくこれを撞くこれを撞くこれを出すこれを
撞くこれを始くこれ者あるこれ
者をいふこの理倚ゐくあるこれ然もこれを附よ寂然不動よ
して因よりこれ耳ふくこれ者をこの
象森羅已具云ふ附ふして者あるこれ時
に者をこれふあるこれ故よ又不見先不見後云ふ皆俳諧の
說なり王沖漠無朕の云ふ易象森羅云ふ
云ふ永嘉の證道歌よりこれ望人のこれ
字義を詳よ者ふ論ふ
或人の云ふ佛の徒も示人をこれ
五陰云ふ故且宋朝以來後者の徒當時の俗語云

て人を曉し示すこと多し。何ぞ佛書祿緣を出すと雖ども
俗語に伝婆々地獄のことを俗語に用ひて
乃理とあらんを出すべく。何の為ぞ
言葉を浅く通用してさるべきあり。佛書祿緣の
中にも用ひくるもの多し。何ぞ是を用ひざるや。たゞ
そもそも意の喜ひ多出ることは辯のうまあれば聖賢の言ふ
りくるあれば。たゞいまいまの人を教へるに
ふるひ用ひらるるあり。沖漢云朕虛妄不昧なるのこと聖
人佛老の宗旨なるもの出ることなるべきを
聖賢の書と少く異なる。況て天測南北の喜ひあるべきのこと
多くふひあるべきなること童子

問の中に一条を語とあるべきなり
先傷の為よりの人ならざるの悪なる人あれば則善あり。悪な
れば上より別に善ならざるものあり。たゞ人の明德のくもりを除くべし。
別に本体の光明あるべきなり。人の上より。一
毫人欲のけがれなきの即是聖人の地位の上なる
の活人なるもの。是皆理なるべきを
聖人の旨にあらざるべきなり。
こと。ことを知の人といふべし。諸多の善行善狀あるべし。聖人
賢者といふべき親に対して不孝のことあるべからざるべし。孝子とは
いふべきなり。人はもとより孝なるべきなり。孝子といふべきを
なるべし。夫子善人を見ることを得ざるべし。強きことを不の人

と皆惡人と為す不善と論ずるは善を不及見不善を探湯するがごとしこれ言葉にかかるまことに大學にいわゆる誠意のごとく先儒の人鬼の関とせるごとく論ずるは強生とも孔子古聖を不知と云ふ善見を人矣と云ふ仁と云ふ知と云ふ

つとめ居て求ることを志行義に達することを聞を語ず見ることを人や

しのゆひくことを知と云ふ上の人はあることを詳ずの

才德あるこれいわゆる賢の意なり人しも先傷仁義と称し

見性は全く異なるこれ人ゆえのごとく有るごとく

あるこの條件の條下にをゆえにさいあることを合せ見る

為に博論の中善惡論あるこれを詳ずと

を理人欲のごとき礼記樂記の篇にいう法せよ善惡の

如人名とせるこの字の條下にあるべき異なることを論ずるなり

てこれをつくる善にして人にものをつくる惡にしてものをつくる人にの

意をよみ法畢竟老子の旨を為すべき人の旨しあるべきなり

あるべし語孟字義にくわしくこれ論ずるところ

中庸章句の序に深近理而大乱真とものべたのごとくあ

やしむべきこと人のごとく人実と法あるべき傷と定め佛老の

人実は廢して傷ともつ畢竟聖人のごとく佛老の差別を

なし此者よりあるべきの精微實妙の說あるべきこと何を称

ふちつくるべきこと何と真をみるべきこのあんや宋朝の

つとめるべきこと人をと法ある又傷と重ずるべきこと聖人

と称ずるべきこと人と困として此の上面の一層

の妄者と妄眞的のものあるとして。妄を名付く妄極大極
とも云ふ。却おもく佛老の邪謂し。ゆくものあるなり。彼らは
此を名付く一貫と。是を寂感のけつちあり
とも云ふ。或は体はなしたるもの。或は用は一本にして体
にあるとも云ふ。是を近理而乱真の說なるゆえあり。予故に
却をしらく。宋朝の學。不可妄此雜や。聖人を乃。不可有此雜
矣。不可妄此弟。此を學ぶ。不欲不純乎聖人而雜乎佛老。
やし

或人の云。ものは則聖賢の書に屢々理とあり。是は
何とさして理とや。聖賢のいふ理と。後世のいふ理と
差別あるべきや。對曰不然。聖賢の書のいふ理とのみ。

後世のいふ理とのみ。聖賢のいふ
理とは。人乃のもとくと云。條理文理のみあり。孟子曰。人之不
同。然者何。謂理也。義也。聖人先得我心。故謂理
義之悅我心。猶芻豢之悅我口。故謂理
謂文理密察。易曰。不謂窮理盡性。皆同一理なり。
ゆえんの理とさしてつよあるべし
理とは義とつて。是相を。故に彼物のもとくのけつく
所の名とつく。人乃の上に。然るに。是を
内とも云。外とも云。その本人とも云。
人君父人同一理なり。是を人乃の君父人は忠孝と云。
君父人は忠孝と云。是を人乃の君父人は忠孝と云。人君
君父人は忠孝と云。是を人乃の君父人は忠孝と云。

生ずべきものなれば、これをなづけて、此物にうるはしく、此物にうるはしくなどいふ。
可否の間と義とは、ものに、かなはぬ事をなすべき物なり。
義を悅び、家に於て、養を悅び、家にやしなはる。孟子曰、仁義と並挙らるべく、此ものよりうるはしく、仁義をいふ。
あるべきこと、人の心に感じて、あれば、義をなすべきものなり。
のこころにして、理義の道あり。
程子の說に、在物為理、處物為義とは、心意は物にして異なり。
うるはしくなすべき物をさして、義とは、人の冠は頭にあるべき物。
なべての物、履は足にあるべき物。礼は、人の上にあるべき。冠履
なべて、人の上にあるべき。礼義なり。

聞くべきものなり。人のあるべきこと、說あり。孟子曰、惻隱は仁の端なり。
一つは、是非あり。一つは、是非あり。彼此の差別あり。孟子の理義
と並稱せらるべき家人と悅しむべきものなり。異意は義
の二つなり。ふたつの生ずべきものなり。何を家人の相ふる
つと。故に孟子に、ものの人、程子の物理を物理とせるべきなり。
の說あり。ものの人、為り次
第、人の乃ち一以貫之とは、今日人倫の上にあるべき
あるべきこと名目、安きこと、端あり次、人の形と生ずるの
よりて、あるべきあるべきこと、乃ち、仁義礼智、乃ち、仁義
仁義礼智、乃ち、行ひのりと、ものと、人あるべきこと
ものなり。說性と說情と說良知良能と說四端のこと說。

さく今日傳ところの者西禍福ぞうひ吉凶人事あるいはかりそ
ふつく。天乃と說て命と說く。実と変ずるふこと不及あるところ
しれ加減よせられいかるかうろふふつく中と說。真実みてろ
ふるあれやうにせられいうふかうろふふつく誠と說。つもどくは
てたくどれ多くせられいかるかうろふふつく恒と說。当みては
ふろあく。吉凶のつ生ふろあうにせられいあるかうろふふつく一と
說。右人の言行を見るあひ所変のまりふつくそのるとふ
ふんいあるくふふつく。学ひ学と云。とくとと云へい
望人のろあるぞれと兼ろ立說ろ。ものつくく
繁多ふしたるふあ次だくいい人生の間。万物調変それく
い徳ふくあふれいかるかうろふ。後世性理の学盛ふ

ふつく。望賢の学にいあるろ許多の学法名員とくふふく。「理
とせろ。変化ふて名ふるいとと。「箇の云秋云殷のものとと
してでふ在ふくい命と云人はあふくい性と云物は在ふくも
理ふつく。ふふとふく中と云微と云」と云学のふとと。「
物は混同せろ。性傷のふふ云。天下云性あふく物。又曰性者万物
ふ一本ふ。性性と次ふく理ふくく說とるせろ。望人の性とのと
ふふ。ふつふ人のふれ付とふて絶万物の理とふて性と
ふふ。これ望人の旨はふるかうと
周濂溪の太極圖說は云。太極而太極と。解は見と注して
云。上ふふく我云者モ云真而実造化ふ柢認不量ふ根拠ふと
あふ。異竟云極太極とふふいふ。「理の名と標

〜たるものあり。此の程〜〜〜の間まも見えと耳にをれまえ
さるものあるふしらく。乾坤義〜〜云。圖解の云義〜〜云眞〜〜云
乾とをしけること。又萬物出れること
出務〜〜云。解の樞紐根柢〜〜〜乾と說り。[redacted]云云
所有程〜〜云乾あり。又小溪陳氏の云。出務者理なる歟。此
宋朝出務の說のあるゆへ。あり。周〜〜と考つるゆへ出務〜〜〜
しへ易の繫辭より。出務〜〜〜

とも陰と陽とのまゝにて有るゆへ陽よりあり故に易には陽と
君子の象にして陰と小人の象にして陽と言にして陰と悪にして
坤の初六よりとるくハ復霜の戒とのまゝ復の初九より積陰の下
陽来復とるとは陰と共にまもとなれなく復にして人倫の上にと
ゐるくも亦たゞ有り明視独言初の上より我くユと見ひらか
会不生の示とるくしてを說かゝ陰子の圖說より
欲を静にして欲くこゝろ静と云むゆ通書より在くを元亨誠
通や利貞誠にく復やゝ陰静と復にしてゝ見望人の旨
翹翹とゝふあゝ法や此学のゝ子別より難あり学ると法ゝ
うくの人と
主務出務のゝ朱子の意あれハ物の実名あり此れを先ま

にしてゝ云出務にして云ゝハ易の原流傳ゆくの中をむるゝ
ゝ元気のゝ有り流書の律歴志より云出務元気亟ゝ
ゝ云の損益有り周子の太極ゝ説ハ流傳ゝ出ゝ有ゝ上面り
一圓の主務にして人のゝ出ゝたゝ周子のけゝむゝて
流傳にして有ゝ経授ハ圖說の家法と通して考ふ出務
動而生陽静而生陰ゝ又主務の真二五の精妙合凝
ゝ動静の示より出務ゝ云出の精の考ハ主務ゝ云出ハ出務
ハ気とゝ主務ハ抑とゝ行ゝ又行一
陰陽や陰陽一出務や出務本主務にして又行と陰陽水出
法先陰陽と出務より出務と主務に中法ゝ
言語ゝと主務出務と主務ゝ主務ゝ主務ゝ有ゝ

古稽郁斉稽といふをして古稽本斉稽とこのつをその無稽の稽なり
して古稽の気しるしるいつくしるしるしる

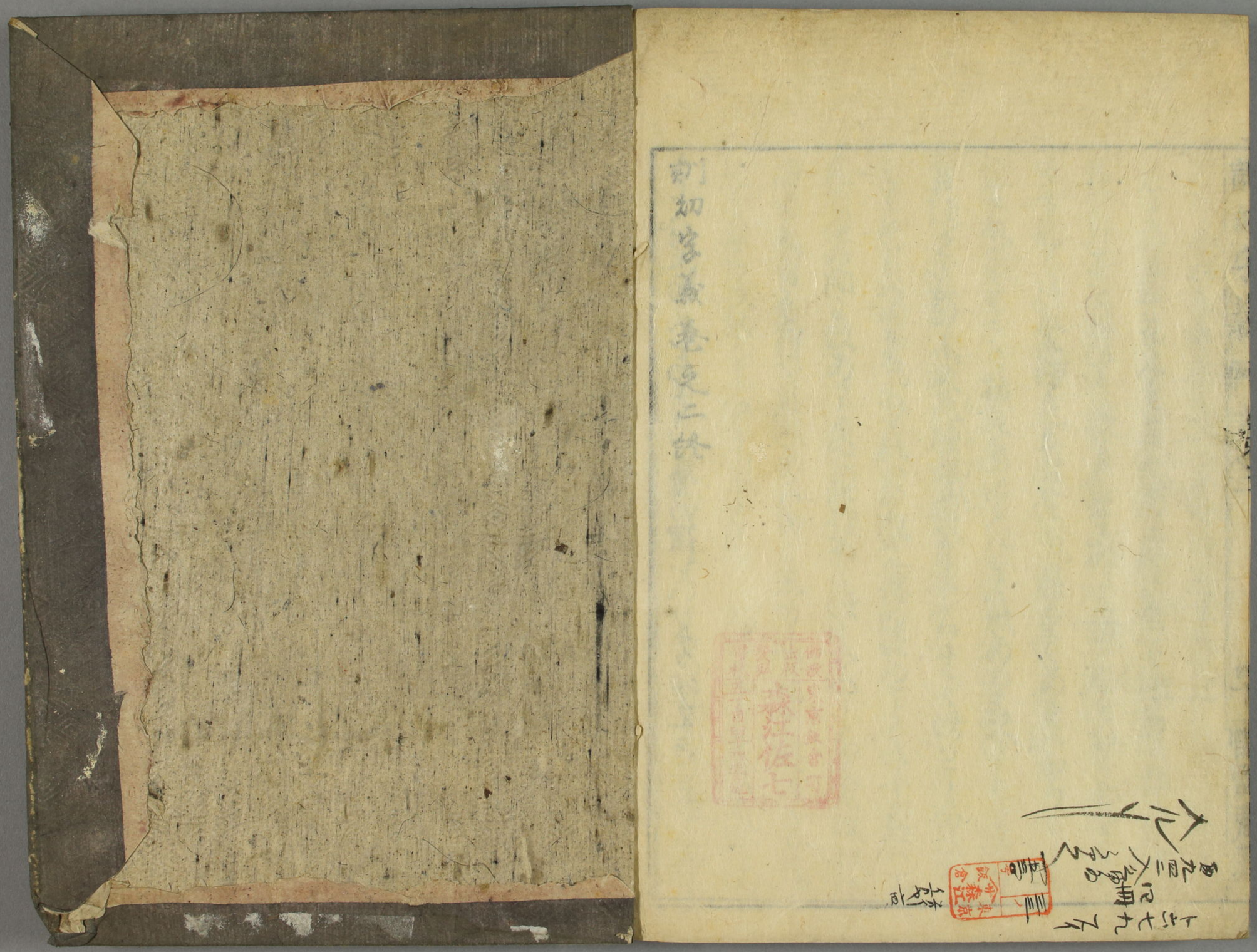
理とも有てゝ有る事なり。先子のいはく。周子のいふ所の
眞二五の精とは。分ては是れ精氣。精氣神化
して万物を生ず。此れ老子の全書と考へて。其旨と通じ
又梁の傅大士の偈に云く。有物先天地。無形本寂寥。能為萬
象主。不逐四時凋。此れも同じ理なり。先儒のいふ所
の形上形下の旨なり。

蒙　蒙眞　蒙蒙　本詩經文王の篇より。上天之載。毛詩
無眞儀式文王。蒙邦作孚。此意にて。文王の德は法る象
らんとの事なり。其の下に。文王の德は天と一体なれば。文王
の德は天地と一体なり。文王の德は天と一体なれば。文王
の法る象らんとの事なり。

義あれば義なり。論語に。何晏の云。孟子に。天不言。
とも。論語に。殺身成仁。孟子に。眞の中に。個の物あり。
ふ。中庸に。其れ鬼神乎。
あれども。是れ。明德の形迹。
いつはあり。此れ。中庸。發揮の義。詳なり。
此れ。天地。大活物。又云て。地。間。元氣。而已。
天地の偉大なる。論語。
もゆえ。元氣あり。理あり。
とくの。絶。物の。
る。本。獻。
物。名。理。具。

なく不無性あるべき物しなるべしかるに今世間に物の上に結ぶ所
のかたちを熟考するに生気あるべきなり陸ひて或は
花とかたちを結ひ或は胞(タイ)を卵(ラン)とかたち
てそれぞれに繁殖とはいはれあるべし或は生気具足あるべ
ハ生気(ツキ)をうけて拍孔(クワレキ)とかたちを成ありとかたちをなす生
育するなり又礫煨(ライビン)ハかたちなきゆえ生
ずるなり生気なきゆえ
元亨の間に成あるものハ此理あるゆえなり礫煨
ハ生をなすと具へさるハ物ハ生ずるも又生ずる
死をなすなり強るものハ物の生ずるハ気ふるう
て強よあるゆえなり易の乾元坤元と始ま

ーて此上面よりとかたちの層の理といふゆえ

訓幼字義卷之二終

佛教出版
東京飯倉町
發弘
雲林
五丁目四十四番地
森江佐七